

執筆者の「層」に注目してさらに分析することが求められるのではないか、また、(3)確かに朝鮮総督府の教育政策は、朝鮮民衆を蔑視して差別的に扱うものであったが、朝鮮民衆の日本語力や文化の違いに配慮してそれに沿うように進められた側面もあり、これは巧妙な日本化の過程にしか過ぎなかったかもしれないが、朝鮮民衆の上記のような要求にだけ影響されたとは言えないのではないか。そして、(4)朝鮮総督府の近代教育遂行の“余波”を受けて、このような朝鮮民衆の「対

応」ももたらされているという関連性にも目を配る必要があったのではないか、などである。以上、若干の疑問をもったがいずれ著者自身から聞いてみたいと思っている。

とはいえ、本書はこれまでの朝鮮植民地教育史研究の手薄な部分を補った貴重な研究であり、著者自身の朝鮮植民地教育史研究者としての確かな地歩をさらに固めた会心の研究成果であると言えよう。

◆A 5判 540頁 本体7,500円
社会評論社 2006年2月刊

■ 書 評 ■

清水睦美・児島 明 [編著]

『外国人生徒のためのカリキュラム』

東京学芸大学 佐藤 郡衛

外国人児童生徒に関する研究が開始され10年以上経過し、多くの研究成果が蓄積されてきたが、ここにきてその研究はやや停滞しているように思える。こうした中で最近注目すべき書籍が刊行されているが、本書もその1冊である。本書は、副題が示すように神奈川県大和市立下福田中学校を舞台にした「学校文化の変革の可能性を探る」実践の記録である。その中心は、学校の教育課程に正規に位置づけた「外国人生徒のための学習」である「選択国際」の取り組みである。I部「学校文化と外国人生徒との関係を探る」、II部「外国人生徒のための授業づくりへの参画」、III部「当事者からみた外国人生徒のためのカリキュラム」という3部19章からなる。I部は、「日本の

学校における外国人生徒という存在をどのように認識するか」という問から、「選択国際」という実践を立ち上げ、それがどのような意味をもったかを中心に記述・分析されている。II部は「その実践にどのように関わり、そこに何を見いだしてきたか」について異なる立場から、教育実践に意味を見いだしている。III部は当事者からみた教育実践の語りである。まず、本書の特徴を通してその意義について述べてみたい。

第1は、外国人生徒にかかわる教育実践を多角的に描き出している点である。中学校教師、研究者、ボランティア、地域の外国人青少年という異なる立場から「選択国際」にかかわった実践が詳細に記述されており、中学校における外国人

生徒をめぐる現実が描き出されている。編者の「1つの授業づくりの、狭い意味での実践報告に終わらない」ようにしたいという意図が成功している。異なる人たちがそれぞれの立場から、実践の葛藤を含めて多角的に記述しており、ここで描き出された「事実」がリアリティをもって伝わってくる。「外国人生徒のためのカリキュラム編成」においては、「外国人生徒が共通の足場を構築できるような場を保障すること」、「各自が固有の経験を語ることでできる場を保障すること」が必要だという主張は、具体的な実践との関わりから導き出してきた知見だけに説得力をもつ。

第2は「境界」という分析概念の有効性である。「境界」という概念により、教室での「外国人生徒」と「日本人生徒」という固定的な関係の組み換えのプロセスを詳細に描き出している。「外国人生徒が日本人生徒と新たな関係を築ける」ように、「境界線の問い直しと新たな境界線の設定」という授業実践が外国人生徒に何をもたらしたかを明らかにしている。このため本書は、実践記録としてだけでなく、教育社会学的な研究としても意義がある。外国人生徒の教育では、構造的な関係性の組み換えや支配的な学校文化の革新を射程に収めた実践を進めなければならないが、その実践を分析する上で「境界」という概念が一定の有効を持つことが具体例をもとに示されている。

本書は、これからの外国人生徒教育の実践と研究に重要な示唆を与えてくれる。次に本書の課題について述べる。まずは、

集団と個の関連をどのようにとらえるかという点である。「外国人生徒という共通の足場」が必要なことを指摘しているが、これはこれまで外国人教育において主張されてきた点である。しかし、同化や排除への抵抗を契機に、外国人のいわば「主体」の構成をはかるという関係構築が、外国人という集団内部の均質化をもたらし、集団が個を抑圧するようになるという問題を抱えてきた。しかも、抵抗と抑圧という関係を前提にした関係構築が外国人という枠を本質主義化してきたという点も忘れてはならない。抑圧と抵抗という関係を前提にする限り、集団への一体性が常に求められ、個人の自由が抑圧されるという問題を抱えることになる。

本書では、戦略的に「外国人生徒の共通の足場」をつくることで、「外国人生徒が固有の経験を語る」実践を展開しているが、この実践を進めれば進めるほど「外国人生徒」という集団への帰属を強め、そこに一体性をもった生徒の語りのみが、いわば「成功者」として描き出すことになりはしないかという問題である。外国人生徒や当事者の語りを取り上げているが、その語りがかなり共通したようにも読み取れる。「共通の足場」をつくるという集団の一体化とそこでの個のありようについては検討を重ねる必要がある。

このことは、外国人生徒教育のあり方をめぐる課題にもつながる。ここでは、異なる立場の人たちが、相互作用を繰り返す中で、相互に影響しあい、実践の場をつくりあげている。実践の過程では新

しい課題が生じるが、その課題を解決するためにさらなる実践を共に展開するというダイナミックな取り組みが描き出されている。実践の課題解決を目指すには、あるべき方向性を示さなければならず、自ずと「当為」の問題が伴ってくる。自分たちの実践のあり方やその妥当性をどのように検証していくかについては慎重な議論が必要のように思う。

最後に、この研究をさらに発展・拡充させていくことを研究グループには期待したい。「選択国際」で外国人生徒が共通の足場を構築した後、それを手がかり

して、「通常学級」にどのように参入していくことができるか、そのためにはどのような戦略が有効か、さらにはどのような学校文化が阻害要因になり、それをどのように革新できるかといった分析である。この教育に長年かかわってきた著者たちだけに、さらなる実践研究の展開と、実践から外国人生徒教育の分析に有効な新たな概念を導き出すことも期待したい。

◆A 5 版 270頁 本体2,600円
嵯峨野書院 2006年4月刊

■ 書 評 ■

潮木守一 [著]

『大学再生の具体像』

(助)日本私学教育研究所 山岸 駿介

本書は、著者が所属する大学で、どのように著者自身が大学改革と関わってきたのか、その体験を克明に記述しながら、そこでの改革の必要性和限界を明らかにした。その上で、我が国の大学進学者の大半を受け入れてきた大衆大学を再生させるための具体策を勇敢に提起した点にある。

本書の特徴の1つは、第一章と二章にある。ここで著者は名古屋大学における改革、とくに5学部が協力して設置した大学院国際開発研究科を中心に、創設までの過程、設置後の運営内容、海外での実地研修の体制づくり、あるいは大学図書館の地域社会に向けた休日開放を実現させた経験など、さまざまな改革の取り

組みについて報告している。国立大学は、法人化によって、かなり状況が変わってきており、現在ならこうまで苦勞しなくてすんだかもしれないが、つい最近までは、ここで記述されていることは、特異な状況ではなく、その結果、我が国の大学が不信を買い、大学が何かをしようとしても、学外から応援団が出てこないわけで、20世紀末の状況を知る上で役に立つ。

ただ、そこでの記述は、大学の内側の人なら分かるが、企業や報道など、学外者には知られていないことが多いかもしれない。著者はそこで、教員だけでなく、事務職員の問題も取り上げており、そこで印象深く書かれている学部エゴの具体